

中村政則

はじめに

申酉事件は 1908～1909（明治 41—42）年に起こった。この事件は文部省が、東京高等商業学校専攻部を帝国大学法科（のち東大経済学部）に合併しようとした事件で、文字通り高商存続か廃止かを定める出来事であった。最後は学生大会で 1300 名が総退学をきめた。いったい、申酉事件は一橋大学の歴史（日本の大学史）にとって、いかなる歴史的意義をもつか、またこれからの一橋大学の将来にとって何を意味しているであろうか。

1. 受難の歴史

1887 年（明治 20）から 1902 年（明治 35）3 月に東京高等商業学校となるまで、わずか 15 年間に 11 人の校長または校長事務取扱が任じられた。官への反発が高商のいわば「伝統」となった。

2. 商業教育理念の対立

初代校長矢野二郎の商業教育理念（読み、書き、そろばん）

明治 20 年東京外語大と合併。前垂れ教育に飽き足りない書生派（平生平鈞郎、水島鉄也など）は高度な教育を要求。明治 26 年矢野校長退陣。

3. 「ベルリン宣言」

小山健三、駒井重格校長時代に商業教育必要論が高まる。福田徳三、関一、志田鉀太郎、石川文吾ら約 10 名の小壮学徒がベルリンに集まり、宣言を起草し、小山校長に送る。Captain of Industry の教育理念

小泉明学長「キャプテン・オブ・インダストリーというのは単に産業界の覇権を握れという意味ではありません。この言葉を作ったのはカーライルですが、彼は 19 世紀前半のイギリスの産業界をみて営利至上主義原則の弊害を指摘し、人間愛にめざめた新しい型の経営者像を待望してこの言葉をつくったのです」。

4. 商業大学必要論 v s 商科大学不要論

東京高商の教科課程は「ノート主義、詰込主義」「実用主義、便利主義」と批判
⇒商業労働者（丁稚）と同時に「企業者階級」の育成を。高等商業と商業大学を
区別し、専攻部を本科より分離して、独立の商業大学とする。これに対し、政府
高官は「実用的人物の養成が目的であって、商業経済、商法などの学理の蘊奥を
究める必要はない」「商業に学問は要らない」。これが、当時の文部省全体の風
潮であった

5. 申酉事件の経過（1908-09年）

1908年、第二次桂内閣成立、文部大臣小松原英太郎、文部次官岡田良平

1909年 松崎内蔵助校長排斥運動（東京帝大財政学教授）

1909年2月、第1回学生大会を開き、松崎校長不信任決議を可決⇒学生退学処分、
学生猛反発

1909年4月、関一、佐野善作、滝本美夫、下野直太郎の4教授辞表提出

高商専攻部を帝大に吸収する案は衆議院を通過、「専攻部は今後四年間存置」

1909年、専攻部廃止令撤回に成功、1914年8月 初代校長佐野善作の誕生

6. 東京商大の成立（1920年）

第一次世界大戦を境にヨーロッパの学問が流入し、明治以来の実学とグルントリ
ッヒ（基礎的な）学問との二条の流れが、本学の学問的伝統となった。

就職の面でも「外交官・高等文官試験の合格率トップ、帝国大学生に劣るところなし」
（「教育時論」1914年）

おわりに

明治以来の実績がなければ、東京商大への昇格もなければ、戦後（1949年）の
一橋大学の発展もなかった（校名をニュートラルな名称にしたのはよかった）。

アカデミック・フリーダム、①研究ならびに教育の自由、②学園そのものの自治^{オートノミー}
一橋大学のアイデンティティとは何か 学生の感想文